

＜追 悼＞

大西武雄先生追悼文集 序に代えて ～上を向いて～

放射線生物研究編集委員長
東京工業大学科学技術創成研究院先導原子力研究所
松本 義久

9月10日に奈良の春日野国際フォーラムで催された「故大西武雄先生を偲ぶ会」には全国から200名を超える方々が参加されていました。これを見て、大西先生がいかに多くの人から慕われてきたかを改めて感じました。もちろん、私もその一人です。大学関係、学会関係、友人、主治医などさまざまな立場で大西先生と深いつながりがあった先生方のお別れの言葉に感銘を受け、これは是非今後に残したいと思いました。また、大西先生は申すまでもなく、本誌の存続、発展に多大なる貢献をされてきましたので、是非追悼特集を考えていたところでした。そこで、お別れの言葉を述べられた神谷先生、田中先生、井尻先生、平岡先生、米井先生にお願いして、当日の原稿を頂きました。また、内海先生からは以前に追悼文を頂いておりました。これに加えて、本研究会会長である藤堂先生、大西先生の薰陶を直接受けられた高橋先生、森先生から追悼文を頂き、本追悼文集ができ上りました。大変お忙しい中、原稿、お写真を頂いた先生方に心から感謝申し上げます。

序に代えて、甚だ僭越ではありますが、私からも少々思い出話をさせて頂くことをどうかお許し下さい。

大西先生との最初の思い出は1995年、ドイツのビュルツブルグで開催されたICRRに遡ります。大学院博士課程の1年であった私にとって、初めての国際学会でした。当時私が研究していた（今も研究している）DNA依存性プロテインキナーゼがDNA二重鎖切断修復の主役に躍り出た年であり、最新の知見に興奮のあまり夜も眠れない日が続きました。大西先生は、その頃放射線や温熱によるp53依存的なWaf1（現在では、p21、CDKN1aの方がよく使われるかと思いますが、大西先生は「ワフ」と言っておられました）の誘導を見出されたことを熱く語られておられました。そして、「研究というものはなあ、世界をあつと言わせるようなものじゃないとあかん」とおっしゃっていました。その最後の夜のパンケットで、突然、ステージに上がって歌を歌おうと声をかけられました。日本からの参加者(20名程度だったかと思う)がステージに上がり、「上を向いて歩こう(Sukiyaki)」を

熱唱しました(右写真)。なぜ、「上を向いて歩こう」を歌ったのか。その時は、日本からの参加者の余興くらいにしか思っていませんでした。しかし、これが 20 年後によく実現する ICRR 日本開催への思いの詰まったものであったことを後になって知りました。ICRR は 1999 年のアイルランド・ダブリン、2003 年のオーストラリア・ブリスベーン、2007 年のアメリカ・サンフランシスコ、2011 年のポーランド・ワルシャワと続きます。日本はこの間ずっと招致に名乗りを上げていたのでした。



ICRR1995 の Dinner で「上を向いて歩こう」を歌っているところ。左から 4 人目、マイクを持って歌っているのが大西先生、右から 2 人目が米井先生、左端が筆者。

ブリスベーンの ICRR で、大西先生の国際的なリーダーシップでアジアの放射線研究分野での連携を深めることができたことが合意され、2 年後の 2005 年に第 1 回のアジア放射線研究会議(ACRR)が開催されることとなりました。その夜、舟山さんと小林さんが私の部屋に来て今後のこの分野のあり方について討論しました。帰国後、当時の若手放射線生物学研究会会长であった富田君も加わって、影響学会総会で意見表明をしました。2005 年の ACRR は京都で開催すべし、2011 年の ICRR は広島を候補地とすべし、国際会議運営のために若手研究者の研究時間を削られるようなことがあっては決してならない、しかし、研究の推進を妨げない範囲において放射線生物学分野の発展につながる協力を若手は惜しまない、その他生意気極まりない内容でした。にもかかわらず(あるいは「だからこそ」だったのか)、次の影響学会会長に就任された大西先生は、私に「若手の意見担当」という役職を授けられ、常任幹事の一人に加えて下さいました。期待に応えて(おそらく)、言いたい放題の 2 年間の任期を務めました。

その 1 年目 2004 年には ICRR2011 年候補地の決定の議論がありました。京都と広島に絞られ、最終的には長崎での影響学会大会の幹事会で投票となりました。上記の通り、広島開催を主張していた若手を代表して、私が広島の応援演説を行いました。結果は一票差で広島に決定しました。しかし、そのおよそ 1 年後、大西先生と神谷先生がメンバーでの決戦に挑んだものの突如出てきたワルシャワに敗れたことは神谷先生の追悼文で述べられている通りです。

もう一つの 2005 年の ACRR は神谷先生を大会長として広島で開催されることとなりました。そのとき、私は若手放射線生物学研究会の運営委員に声をかけ、科研費基盤(C)企画調査に応募しました。大西先生、神谷先生にも分担者に加わって頂きました。この科研費が採択され、第 1 回アジア若手放射線研究者会合(YRSA)を ACRR と同時開催し、インド、中国、韓国、タイから 27 名の若手研究者に広島に来てもらうことができました(これについては本誌 2005 年 12 月号に報告を書かせて頂きました)。ここでできた繋がりは 12 年経った今でも続いています。

大西先生は、お立場上、いつでも表に出すわけにはいかなかったと思いますが、いつも心の中ではこうした発言や活動を応援して下さっていたと思います。何度かこう言われたことがあります。「松本君、君を見るとワシの若い頃を思い出す。君はワシの若い頃にそっくりや。」

その後、私は 2006 年 12 月 1 日に東大から東工大に異動し、新たに研究室を立ち上げることとなりました。着任初日に大西先生にメールでお知らせをしたところ、お返事のメールの最後に、次の言葉がありました。「結局、人間最後は一人です。これからもしっかり勉強して、大きな研究者になって下さい。」

今年 5 月末、内海先生と高橋先生からのメールで大西先生が入院されていることを知り、大変驚きました。毎年恒例の 2 月の奈良シンポではいつものようにお元気で、質問もされていたからです。そして、大西先生と最後にお会いしたのは、6 月 17 日に奈良医大の病室をお見舞いしたときでした。ちょうど島田先生と柿沼先生も来られていました。長谷川先生からは意識もはっきりしないときがあるとうかがっていましたが、そのときは会話もはっきりされ、体調も比較的よさそうでした。会話は悲壮感漂うものではなかったのですが、影響学会の将来を宜しく頼むとか、目標や決意は何かとか、最期を覚悟されていることがひしひしと伝わる内容でした。私は、「放射線生物学から生物学全般に通じるパラダイムを創ることが目標です」と言って参りました。思い出話もしました。「上を向いて歩こう」の話をすると、「あのときは楽しかったなあ」とおっしゃいました。退室する際、一人ずつしっかり握手しました。手は「頼んだで」、そして、目は「もう君たちに言い残したことではない」と言っているように感じました。

大西先生のことを思い出すとき、いつも浮かんでくるのは「上を向いて歩こう」です。これが原点だったからには違いありませんが、それだけでなく大西先生が 20 年余にわたって伝えてくれたメッセージではなかったかと思えてきます。研究において、いや、人生全般において向上心を持ち続けなさい。また、上を向けば、頭上にロマンと神秘にあふれた宇宙が広がっているよ。そして、辛いこと、悲しいことがあっても一大西先生が亡くなられた今もまさしくそうですが一涙がこぼれないように上を向いて、前に進んで行きなさい。上を向くと宇宙から大西先生がそう言いながらあの優しい眼差しで見守って下さっているような気がします。

大西武雄先生を偲んで

日本放射線影響学会理事長・放射線生物研究会会长

藤堂 剛

大西武雄先生、謹んでご冥福をお祈り申しあげます。先生の日本放射線影響学会への多大なご貢献に対し感謝の言葉を述べさせていただき追悼とさせていただきます。

日本放射線影響学会はこの半世紀の間、研究面から、また我が国の科学政策の影響から多様な変遷を経験して参りました。先生は、ご生涯を通じ様々な局面で放射線影響学会を先導されるとともに、後ろから支えられてこられました。1970年代本学会発展期には、京都大学放射線生物研究センター設立に向け、当時の若手を代表して奮闘されたとお聞きしています。その後、科研費見直し問題をはじめとして、我が国の中での放射線生物学の立ち位置が大きく変化してきましたが、そのような状況の中で、先生は自らのご研究を、より臨床に関連する方向に、あるいは宇宙生物学という今後の発展が期待できる分野にシフトされるとともに、放射線影響学会においても、学会会長として、これらの分野との連携を視野に入れた様々な改革を行ってこられました。その後の我が国の中の科学政策の変遷をみると、先を読まれた実質的なご判断であった事がわかります。また、研究面のみでなく、2004年の日本学会事務センター破産事件に際しては、素早い行動をとられ、本学会への財政的損害を最小限に停める活躍をされる等多方面にわたる活躍をされました。さらに、ICRR2015においては、その招致から運営まで御尽力いただいた事は皆様のご記憶に新しいところです。この様に、この半世紀にわたり本学会を支えていただいた先生のご貢献に対し、放射線影響学会理事長として深く感謝するとともに、お礼を述べさせていただきたいとぞんじます。長い間有り難うございました。

大西先生は大阪大学理学部生物学科の本城市二郎・野津敬一先生の教室ご出身です。私事ですが、私も同教室の出身で、後輩にあたります。この縁で、様々な面でご支援いただきました。本城研は電磁波である放射線や紫外線の生物作用から、視覚まで光生物学の様々な分野を網羅していました。大西先生も当初は紫外線の生物作用から研究をスタートされ、放射線、あるいはより臨床に近い分野へと幅を広げていかれました。その間、生物材料も粘菌を使われる等、極めて自由な発想の下、研究を楽しみながら進められているご様子、後輩としては羨ましく拝見させていただいておりました。先生が示してきた、自由な発想の下に、しかも先見性を持って研究する姿勢を受け継ぎ、本研究分野を今後更に深く切り拓いていく覚悟である事をお伝えし、お別れの言葉とさせていただきます。

有り難うございました。ご冥福をお祈り申しあげます。

大西武雄先生を偲んで

広島大学 副学長
福島医科大学 副学長
神谷 研二

大西武雄先生の早すぎるご逝去の報に接し、誠に残念に思うと共に、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

大西先生のご訃報は、未だ信じられない気持ちが強く、こころの整理が旨くできず茫然とします。

私は、影響学会を代表できるほど大西先生と長く深いお付き合いをさせて戴いた者ではありません。大西先生とは、研究を通じてというよりはむしろ、日本放射線影響学会（影響学会）やアジア放射線研究連合会議(ACRR)、及び国際放射線研究連合会議 (ICRR)での仕事を通じて、お付き合いをさせて戴きました。影響学会の友人というよりは、むしろ敬愛する先輩として、いろいろの事をご教授戴き、ご指導を賜りました。これらの仕事を通じて大西先生のお人柄や人並はずれた行動力、先見性、そして企画力に触れさせて戴き、その才気溢れる発想に何度も目の覚めるような経験をしました。

この様な私が、影響学会の多くの先輩や知人の前で大西先生を偲ぶ言葉をたむけるのは、はなはだ僭越ではありますが、私は、大西先生との思い出と感謝の念を述べたいと思います。

大西先生とのお付き合いは、何時も突然の電話で始まります。その時の電話は、大西先生が学会長を務められている影響学会の 2005 年の第 48 回学術大会を広島で開催してくれないかとの打診でした。しかも、その際に第 1 回のアジア放射線研究連合会議 ACRR を同時開催してくれないかとのお話でした。私は、当時、学会の開催経験もなく、国際学会を含む 2 つの大会を同時に開催することが出来るはとても思えませんでしたので、丁寧にお断りし、放影研の先生にお願い致しました。しかし、放影研の先生方にも受けて戴けず、大西先生の熱心で独特な説得に負けて広島で 2 学術大会を開催することになりました。

私の不安を他所に、大西先生からは学会開催に必要な資金集めの方法から始まり、様々なご助言を戴きました。そのお陰で、2 つの大会は、成功裏に終えることができました。心配していた第 1 回の ACRR も 11 か国 110 名のアジア諸国の研究者にお集まり戴くことができ、大会中にアジア放射線研究連合 AARR の設立総会を開催することも出来ました。初代の会長に就任された大西先生と新たに理事に選出されたアジア諸国の研究者と記者会見を行ったことが昨日の様に思い出されます。

その後、私は影響学会の会長に選出されましたが、大西先生から学会運営に関する様々なご指導を戴きました。大西先生は、影響学会の学会長を退任された後も日本放射線研究連合の会長として、熱心に ICRR の誘致に取り組まれました。ICRR の誘致では、大西先生との二人三脚の旅を経験させて戴きました。当時、歴代の影響学会会長による ICRR の誘致がことごとく失敗していました。そこで 2011 年には、是非とも広島で開催しようと大西先生と準備を整え、ICRR の理事会が開催されているデンバーに乗り込みました。大西先生は、例のエネルギーッシュな行動で各国の理事を説得して回われましたが、ラジウムとポロニウムを発見したマリーキュリー博士のノーベル賞受賞 100 年を掲げるワルシャワに見事に敗北しました。失意の裡に、大西先生と帰国の途につきましたが、大西先生から暖かい慰めのお言葉と様々な心遣いを戴きました。大西先生の人間性溢れる心情を実感できた瞬間でした。この話には、後日談があります。2011 年に福島第一原子力発電所事故が起きました。もし、デンバーで 2011 年の ICRR 日本開催が決まっていたらと考えるとゾットします。海外からの参加者は望めず、私自身、福島事故への対応で忙殺され、ICRR 開催は断念せざるを得ない状況だったと思います。「人間万事塞翁が馬」を地で行った例ですが、デンバーでの失意と共に経験した大西先生とは、何時もこの話では盛り上がります。その大西先生がもう居られないことは本当に寂しい限りです。

大西先生は、その後も自らの宿題として ICRR 誘致に取り組まれ、2015 年に平岡会長の下で京都開催に漕ぎ着けられました。私は、事務総長としてお手伝いをさせて戴きましたが、ここでも大西先生は、持ち前の行動力を発揮され、平岡会長を支えて ICRRKyoto を成功に導かれました。

この間、突然の電話は鳴り続き、節目、節目に大西先生の独特のお声での、熱く才気溢れる話を伺いました。

最後の突然の電話は、平成 29 年 5 月 27 日でした。電話の内容は、進行がんの病状を伝える驚愕の内容でした。大西先生は、気丈に話されていましたが、何時もの豪快なお話をされる大西先生とは違い、言葉の端々にただならぬ深刻さと寂しさを感じました。その後、お見舞いに伺いましたが、意識はハッキリされておられるものの体力の衰弱が激しいご様子でした。広島での学会開催やデンバーでの敗北、そして大西先生の集大成である ICRR2015 の話を懐かしそうに話されました。別れ際に大西先生への深い謝意を述べましたが、大西先生から「ありがとな」のご返事があり、眼に光るものありました。

大西先生は、友人や先輩、自分の弟子を大変大切にされる人で、彼らのために様々な心配りをされる人でした。また、影響学会の後輩を育てるこことにも熱心で、才能ある若手を学会で登用したり

国際放射線研究連合 International Association of Radiation Research に売り込んだり熱心に取り組んで来られました。大西先生のお弟子さんたちが恩師のご逝去を悼み、恩師に謝意を現す様々な取り組みをされている様子からも大西先生が如何に弟子たちに慕われていたかが伺われます。

大西先生、長い間、本当にありがとうございました。もう何事も心配することなく、静かにお休み下さい。

お別れの言葉

元・日本ハイパーサーミア学会会長
川崎幸病院 副院長・放射線治療センター長
田中 良明

大西武雄先生、謹んで先生のご逝去を悼み、本日ここにお別れの言葉を述べさせて頂きます。

先生は、私たち日本ハイパーサーミア学会にとりまして、余りにも大きな存在でありました。先生は長年にわたり日本ハイパーサーミア学会の会長として重責を果たしてこられました。その期間は、二〇〇二年九月から二〇一五年九月までの実に十三年間であり、その長い間、学会の運営にご尽力していただきました。私は、先生が会長に就任される七年前の一九九五年四月から三年半程の間、会長職を務めましたが、先生はその三倍以上の間、会長職の要職に就かれていたのです。

先生の学会活動でのご功績に関しては数えきれないものがありますが、中でもわれわれの学会が一般社団法人へ移行できたのは、先生のお力によるものと思っております。理事会などでは、いつも先生からは信念に満ちたお言葉を頂戴し、それによって学会を束ねていってくださいましたが、その手腕には心から感服させられました。

学術大会の開催に関しても先生は見事にその手腕を発揮され、二〇〇六年にはアジアハイパーサーミア学会と日本ハイパーサーミア学会の合同大会を奈良で主催され、また二〇一二年の京都での国際ハイパーサーミア学会と日本ハイパーサーミア学会の合同大会の折には、名誉顧問として大会を取り仕切ってくださいました。いずれの大会も、ハイパーサーミアの基礎から臨床まで幅広い研究分野を網羅し、大会を成功裡に終えられました。

学術大会以外では、「ハイパーサーミア:温熱療法ガイドブック」を編集、刊行され、またハイパーサーミアの認定制度にも心血を注がれ、がん温熱療法の社会的な認知度を高めてくださいました。さらに、温熱療法の診療報酬に関しては、残念ながら点数改定の要望は叶えられませんでしたが、厚労省、内保連などへの働きかけでは、多大なご尽力を賜りました。

先生の学問に対する姿勢はいつも純粹であり、サイエンスという言葉を誰よりも大切にしてこられました。先生はご専門の生物学の立場から、生物の細胞内で起こっている様々な生命現象をとらえて、それらをクリアカットに解明していく姿勢を示してこられました。そのことが、多くの若手研究者たちの心をとらえていたのだと思います。毎年二月には奈良の猿沢の池の畔で「癌治療増感研究シンポジウム」が開かれましたが、その際には先生の奈良医大の生物学教室の方々のご協力により、会を見事に運営して頂きました。開催日が二月中旬であったこともあり、時には雪景色に飾

られた猿沢の池や興福寺の五重塔を眺めながらの研究会は、我々参加者には忘れられない想い出を残してくれました。

私個人としましては、海外でのハイパーサーミア関係の学会に何度かご一緒させていただき、貴重な体験をさせていただきました。中でも二〇〇二年のカイロで開かれたエジプトでの学会では学術講演の後、先生と一緒にラクダに乗ってピラミッドを見学致しましたし、インドのムンバイでの学会や、ドイツ、ミュンヘンでの国際ハイパーサーミア学会などで、外国の著名な先生方と交流する機会を持てたことなど、数多くの想い出があります。

私たちは先生のご病状については、ごく最近までよく存じ上げておりませんでしたが、今回、改めてこれまで先生から頂戴していた電子メールによる年賀状を読み直してみると、旅先での想い出などの文面に交じって健康管理に関する語句を垣間見ることができ、それなりに気を遣われていたことを知ることができました。

私が日本大学を定年退職した際の記念誌には、「田中先生の後姿を追っかけて」と題した寄稿文を寄せていただきましたが、今から思えば、実際には私の方が大西先生の後を追っかけていたのです。その先生が先に旅立たれてしまわれたことについては、誠に深い悲しみの極みにあります。これからは先生の残された数々の教訓を心の糧にして、励んでまいりたいと思っております。

大西先生、長い間本当にありがとうございました。どうか安らかにお眠りください。

お別れの言葉

東京大学名誉教授

井尻 憲一

大西先生。井尻憲一です。私たちの日本宇宙生物科学会においても、会長として法人化への対応、研究費の獲得など、学会の発展に多大な貢献をしてくださった大西先生が地球から去って行かれたことに、学会員一同、ショックを受け、悲しみにくれております。

私と大西先生との出会いは、私がまだ大学院の学生だった時で、徳島大学で開かれた放射線影響学会においてであり、かれこれ 42 年前になります。大西先生は当時、すでに県立医大で講師をされていました。今だから言えますが、先輩に紹介された大西先生の第一印象は、ドスの効いた声で挨拶されたせいか、「ちょっと、怖そう。」というものでした。ところが、それから一年も経たないうちに先生とは、「井尻君」、「大西さん」と呼び合うまでに親しくして頂きました。

当時、大西先生たちが中心となっておられた放射線生物学の若手研究者の会がありましたね。京都大学の原子炉がある熊取町や、とある会社の琵琶湖湖畔の研修施設において、1泊 2 日あるいは 2 泊 3 日の勉強会が行われ、そして、もちろん夜から飲み会が始まり、朝まで学問や将来を語り尽くしました。このような会での大西先生は第一印象とは全く違い、楽しく愉快な先生がありました。以来 40 年の長きにわたり、先生とおつき合いさせて頂けたのは、私にとって本当に幸せなことでした。

1990 年前後から大西先生も私も宇宙実験に興味を持つようになり、1994 年には私はメダカを使って、大西先生は粘菌を使って、同じスペースシャトルで宇宙実験を行うことになりました。フロリダやハンツビルで先生と過ごした数週間は良い思い出です。先生はその後も宇宙実験を続けられ、宇宙放射線が DNA に及ぼす損傷及びその修復に関して、合計 20 回ほどの宇宙実験をされ、素晴らしい成果を残されました。

大西先生も私も関西出身であるからでしょうか。講義や講演においても、受け狙いで冗談を言わないと気が済まない性格でした。東京の小学校の公開講座として、先生と私が宇宙の生物学について講演したのを覚えておられるでしょうか。あの時、私は先生に負けないようにと、できる限り面白く話したつもりでしたが、両方の講演を聞いていた東大の水野利恵先生からは「笑いをとった回数も笑いの大きさも、大西先生の方が断然多かった。」と言われてしまいました。でも、実は、そんなことは私には最初から分かっていたことなのです。なにしろ大西先生には、先生の 18 番のジョーク、あの必殺のジョーク、いわゆる”hair ? a little”的ジョークがあるのですから。

せっかくのジョークですから、私が皆様に説明します。これは先生がアメリカに留学されていた時に、アメリカで運転免許を取るために関連する施設に行かれた時のお話です。係りの黒人の太ったおばちゃんが書類を作成するために、先生に質問をします「Nationality、国籍は?」、大西先生が答えます「Japanese」。おばちゃん「Eye color、目の色は?」、大西先生、黒目だから「black」。おばちゃん「No, No, Your eyes are brown」。どうやら日本人の目の色は、あちらでは brown に分類されるらしいです。さらに、おばちゃんが聞きます「hair?、髪の毛は?」。ここで大西先生、黒髪だから black というところを、hair?と聞かれて、「a little、少しだけ」と答えます。これには、おばちゃん大爆笑。「You are smart. あんた、賢いね」。というわけで、即、合格になったという話です。これが、我々が大西先生の“hair? a little”的ジョークと呼んでいるものです。

大西先生。私が話しても、少しは笑いを取れました。でも実際には、この会場のお写真にあるような髪型をした先生が“hair? a little”的ジョークを言われるのですから、講演会場は大爆笑でした。あれで、それまで固かった会場の雰囲気が一気に和らぎました。あとは先生のペースで進みました。ちょっとしたことにも会場は笑いが起り、眠る人などいませんでしたし、時々、質問も出ました。本当に先生の”hair? a little”は、私が知る限り、地上最強のジョークの一つです。

大西先生は7月8日未明に地球から去って行かれました。ちょうど七夕の夜が明けた頃です。天の川の伝説では織姫と彦星が一年に一度会える夜を終えて、天の川の東と西に別れていく時刻に当たります。七夕に合わせて、天に旅立たれるなんて、さすが宇宙が好きだった大西先生らしいと感心しております。

七夕のお話ですが、先生が地球を去られてから、けしからんことに携帯会社 au のテレビ・コマーシャルで、織姫の元カレが彦星だというようなインチキな話が放映されています。あの二人は、ちゃんと入籍しているご夫婦ですよね。引き合させたのは織姫のお父ちゃんで、会うなり二人は一目惚れ、相思相愛で、すぐに結婚。ところが仲が良すぎて、毎日毎日イチャイチャし続け、全く仕事をしないので、織姫のお父ちゃんが天の川の端と端に二人を別居させます。でも籍は入ったまま、ちゃんとした夫婦ですから、年に一度だけ合わせてやることにした。そんな無茶なことができるるのは、織姫のお父ちゃんが天の神様だから。このような話でした。

夜が明けて二人が天の川の東と西に別れて行く頃を見計らって、先生が天へ旅立たれたのは、一年に一度という貴重な夜を過ごしている二人のところに行くのを遠慮されたからでしょう。あれから時々考えているのですが、先生はどちらの方へ行かれたのでしょうか。織姫さんの方でしょうか、彦星君の方でしょうか。

織姫さんの所ですかね。なにせ旦那と別れたばかりで悲しんでいますから、先生の得意のジョークで元気にしてあげたとか。”hair? a little”的ジョークには織姫さんも抱腹絶倒、ゲラゲラ笑ったことでしょう。でも、これは私の推測ですが、実際には大西先生は彦星君のところへ行かれたのだと思っています。彦星君を前にして「若い頃に、ちゃんと働いておかんと将来、一人前になれへん

ぞ。」、「仕事も、人に言われたことをやるだけでなく、自分の頭で考えて工夫してやるんやで。」などと、プロとしての仕事の厳しさを彼に伝えておられたのではないでしょか。

冗談を言って人を笑わす明るい先生も大西先生的一面でしたが、研究者の立場から研究の厳しさを、そして教育者の立場から学問だけでなく人生の歩み方を若者に伝えられた、これも大西先生でした。

近頃は若者に注意することは、なかなか難しくなっています。こちらが相手のため良かれと思って注意しても、相手がどう感じ取るかによって、パワハラ、アカハラ、場合によっては、セクハラなどとされてしまいます。私などは注意したくても、ついつい、ちゅうちょしてしまいます。でも、大西先生は違いました。お弟子さんがこれから先、研究者として伸びるために必要なことは、ちゃんと注意された。学生が人として正しく生きるために、言うべきことは、はっきりと言われた。でも、その根底には教え子や弟子に対する先生の愛情があり、皆様も先生の愛を理解されていたからこそ、たとえ厳しい指導でも先生について行かれたわけです。その証拠に本日、たくさんの教え子の方々、お弟子さん、そして修士号、博士号を取得するため先生に研究の指導を受けた方々が、先生を偲んで来ておられます。

大西先生を羨ましく思うことがありました。“hair? a little” のジョークが大受けすることも羨ましかった。宇宙実験を志す者として、先生が 20 回近くの宇宙実験をされたことも羨ましい限りでした。でも、最も羨ましかったのは先生が私と話している時に、教え子やお弟子さんの、それぞれの名前をあげながら、「誰々くんは、あの時、こうしてな、.... それから、こうなったんや。なあ、面白い子やろ。」とか、「あの子は、こんなことがあったんや、ほんまに優しい子やで。」などと、それぞれの方のエピソードを楽しそうに話される時でした。先生の皆様への愛情が感じられるとともに、先生と教え子やお弟子さんとの間の深い絆を知り、感激したものです。

先生は偉大でした。私は、先生を尊敬しておりました。今まで、本当にありがとうございました。新しい場所での、ご活躍を期待しております。

お別れの言葉

ICRR2015 大会長

平岡 真寛

ICRR2015 の日本開催、その成功は大西武雄先生の存在無くしてはあり得ませんでした。関係者一同を代表しまして先生にお礼の言葉をお送りさせていただきます。

ICRR は 1979 年の東京開催以来、その二度目の開催は日本の放射線関連学会関係者の長年の悲願であったと聞いています。もう一息のところまで行きながら敗退した 2 回の招致活動の後は、ICRR の招致を主たる目的として発足した JARR の代表者として陣頭指揮され、無投票による京都開催を実現されました。

ICRR は多くの研究領域が参画する複合的な、また大きな国際学会であるため、ICRR2015 大会長に指名された私にとってはどのように運営するか、特にプログラムの決定と財政面での対応が大きな課題でした。大西先生は、放射線関係の学会と連携して、その力を借りること、研究機関、大学の大型研究プロジェクトとの共同シンポジウムを行うことなど、実に的確なアドバイスをしてくださいました。その一方で、会議の中身については全くといって良いほどタッチされず、一世代以上若い我々にプログラム作成から各種の企画までを任せくださいました。

大会が始まりますと大西先生は ICRR2015 の主催者である JARR 会長として見事な開会式のあいさつをされました。その原稿には、パラグラフ毎に、秒単位の時間割が示されていました。こんなに偉くなられた先生がここまで周到な準備をされることに感銘を受けました。

大会の目玉企画である Gala Dinner は東映の映画村で開催されました。大西先生には、水戸黄門のお姿で参加者の皆様をお迎えいただきました。わしがだれかわからなかつたと子供のように無邪気に喜んでおられた大西先生のお姿を今も良く覚えています。ICRR が成功裏に終了した後も、素晴らしい会議であったと折にふれ何度も褒めていただきました。

大西武雄先生は ICRR2015 の産みの親であるとともに、我々、実行部隊を温かく見守ってくれ成功に導いてくれた兄貴、父親であります。ICRR2015 の折には、既にがんが広がっていたことを知ってしまうと、先生の人としてのすばらしさ、偉さに尊敬の念を禁じえません。

先生には、本当にお世話になりっぱなしです。ICRR もその例にもれなかったのですが、ICRR の成功を先生に喜んでいただけたことで、少しあは恩返しができたのではないかとありがたく思っています。

大西武雄先生、有難うございました。どうか安らかにお休みください。

友人を代表して

米井 健治

大西君、こういうところで、君にお別れの言葉を言わなければならないとは思ったこともなかつたし、なんとも無念です。

高橋さんからの連絡を受けて、その週末に、奈良医大の病室にお見舞いをさせていただきました。学生時代のころから、今までのいろいろなことを思い出しては、手を握り合って、長い時間、話をしました。久しぶりの君との悲喜こもごもの会話だったけど、それが最後になりました。もう何回か病室に伺っておけばよかった、といま悔やんでいます。ごめんな。

皆様からのお言葉で、君が生涯をかけてがんばってきた多方面にわたるいろいろな功績、今さながら感動しました。おそらく、君自身も同じ気持ちでいるのかもしれませんね。それを実現させたのは、大西君の、それはすごいサイエンス魂というか、あふれる好奇心だったのでしょう。いや、後世にいつまでも残される見事な功績です。

私には、大西先生という言い方はちょっと合いませんので、この後も大西君と呼びかけさせて下さい。

ここにご列席の方々の誰よりも、私は、大西君とのつきあいが長い間柄の一人かもしれません。君が阪大理学部の3年生のときからのつきあいでした。大学院に進んでも同じ野津研究室にいましたので、もう何年になりますか。いささか感傷的な言い方をすれば、私たちは同じころに青春時代を送った仲間でした。

とくに、二人がよく気があったのは、君も、私も神戸に住んでいたので、大学からの帰り、よく君のトヨタ・パブリカに神戸まで乗せてもらっていたからかもしれません。よく話をしましたね。運転しながら、フロントガラスに指でDNAの二重らせんを書いて、ポリメラーゼがここをこうなったときにこうなるかなあ、など、いま思い出したら危ない話ですが、よく車の中でディスカッションをしました。なつかしいですね。

ところで、大西先生といえば、ここ十数年前あたりから、頭がすっかり丸くなつて、顔も大きくなつて、自信に満ちた成功者という雰囲気だと受け取られていたのでしょう。しかし、学生時代の大西君は、ずっとスリムで、髪の毛も黒々していて、なんといつても、私が印象に残っているのは、素直でいい性格の若者でした。それと、実験でも、よくやったソフトボールでも、車の運転でも、とにかく、常に前向きというか、自分の着地点をいつも考えて、それを前に、前に、置き直していくという姿勢を強く感じていました。それを着実に伸ばしていく、その姿勢は、終生、変わらなかつたように思います。

大西君は、率直な人で、いつも笑顔で（お手元に配布されています式次第に写真がありますが、真ん中の段の右端の大西君の笑顔、涙がでそうになります）、そのいい笑顔と豪快な笑い声がたえない、好青年でした。が、一度だけ、こわい顔をして私に文句を言ったことがありました。

昭和 48 年ごろ、私に子供が生まれることになり、研究室で野津先生や隣の研究室の助教授だった向畠先生、大西君らと、そんな話で盛り上がつたときに、「生まれてくる米井二世が男の子か女の子か、かけようか」という話になりました。いい時代だったのですね。助教授二人は「そりや女の子やで」となり、私は「男の子かな」と思い、大西君は私を見て、男の子だと確信したようです。負けた方が勝った方に、阪大の職員食堂で一番の高級料理をご馳走することになりました。

結果は女の子でした。二人の先生がたは、高いコース料理を遠慮もなく注文し、昼間からビールも飲んで、「いや、おめでとうさん！」と上機嫌。貧乏学生二人が割り勘で勘定しました。研究室に戻る途中、大西君が私に、「自分の子やのに、わからんかったんか」とこわい顔をして文句を言いました。覚えてますか。

ところが、すぐ後で、君にも二世が生まれたときに（ここにご列席されていますが）、私が「分かってたんか？」と尋ねると、真面目な顔で「そんなもん分かるはずないやろ」の一言。大笑いをしました。

大西君が放射線影響学会の会長に選ばれて、たまたま会議室の廊下で二人きりになったときに、「大西、がんばれよ！」と声をかけたら、「うん。うれしいなあ、いま、大西なんて呼び捨てで言ってくれるのは米井さんだけや」と嬉しそうに答えてくれた。はたらき盛りのときだったのでしょう。そのあたりから、君の猛烈な仕事ぶりは、京大にいた私にもよく聞こえてきました。本当によくがんばったね。

話したいこと、紹介したい若いころのエピソードはまだまだですが、時間がないので、ごめんな。

少し昔のように、お酒を飲みながら話を続けたかったね。おたがいにトシとて、いろいろな思い出や、自慢の奥さんや子供たちのこと、なんでも話題にして、脱線もしながら話したかった。

「米井さん」、「大西」で。あの笑顔でね。

それが、私には一番無念です。

大西君、ご苦労さまでした。どうか安らかに。ありがとう。

大西武雄先生を偲ぶ

京都大学名誉教授

内海 博司

思い起こせば、大西武雄先生とは半世紀も前の院生の頃、放射線生物を専攻する学生の集まりでお会いして以来の友でした。卓球や中国語もお互いに好きで、若い頃には学会ごとに、総会会場を抜け出しては遊んでいましたが、最近は立場上無理になったねと愚痴をこぼし合う悪友でもありました。そんな彼が大病を患っていることを隠すために、昨年の日本放射線影響学会に顔を見せず、どうしたのかと不審に思って電話をかけて糾しても決して病気の話はしませんでした。突然、2017年5月29日に入院するという電話を受け、初めて大病と鬱っていたことを知りました。しかしそれから1ヶ月ほどの闘病生活で、7月8日、72歳の若さで亡くなられるとは思いもよませんでした。これからも後進の指導に活躍して欲しい大西先生をこんなに早く失い、心にぽっかりと穴が開いたような気がしています。心からご冥福をお祈り申し上げます。

1954年3月1日に、ビキニ環礁でアメリカ軍の水爆実験によって起きた「ビキニ事件」が契機となって、多くの先達の希望を託された「放射線生物学教室」が、東大・京大・阪大の理学部内に設置されました。阪大理学部と京大理学部に新設された「放射線生物学教室」の教授を兼任されていた本城市次郎教授の下で、野津敬一阪大助教授（後の奈良医大教授）の弟子である大西先生と、加藤幹太京大助教授（後の京大教授）の弟子である私とは、本城市次郎先生の門下生（孫弟子）という仲でした。

残念なことには、これらの3教室は京大に半講座として残っているだけになっています。広島・長崎の原爆やビキニ事故などを経て、多くの放射線生物医学関係者（医学・生物学・測定学・保健物理学・環境生物学等）の先人達の努力にも関わらず、2011年3月11日の福島原発事故に応えられる放射線生物医学関係者の緊密な連携体制や放射線生物医学の発展がなかつたことが暴露されました。そのような中で放射線生物医学の発展に貢献してきた大西武雄先生のご逝去は、本当に残念で悲しい限りです。

我々が大学院生の頃、吹き荒れた大学紛争のため人事は進まず、更に新設の「放射線生物学」教室を出た我ら研究者の卵の受け皿は無い状況でした。そのような時期に、菅原努京大医教授や近藤宗平阪大医教授らが中心になって、全国の放射線影響研究者の希望を託した「放射線影響基礎研究所（放基研）」の設立運動が始まっていました。若手の就職先をつくるのだから、若手自身が頑張らなければならないということになり、当時、就職先の無い院生であった大西先生と私は、放基

研設立準備委員会委員として選出され、放基研の概算要求書作りを手伝っていました。当時から親分肌の大西先生を、私は同じ年か年上だと思っていました。

当時、菅原努研究室の助手をされていた堀川正克先生が金沢大学の薬学部教授にご栄転になり、その後任ポストに私は就職できました。その後、菅原研究室にもう一つのポストが空き、大西先生と同僚になるチャンスがありました。しかし指導教官である野津先生が阪大から奈良医大教授へとご栄転になり、一緒に大西先生も奈良医大に移されることになり、それは実現しませんでした。結局、そのポストは丹羽太貴先生が得ることになりました。

その後、研究交流企画部、9 固定研究部門、3 客員部門を持つ大研究所である放基研構想は、その第1期計画の部分だけを残して、放射線生物研究センター（放生研）として凝縮し、早期設立を進めることになりました。当時この運動をサポートする組織として、各地の放射線生物懇談会（RBC）を統合した全国 RBC 連絡会議という組織（仮想研究所）が作られ、その長として野津先生が就任されました。このようにして全国の放射線医・生物・測定・環境の研究者達の希望と熱意ある努力のお陰で、放生研が設立されました。野津先生の退官後は、後任教授になられた大西先生が研究室を引き継ぐと共に、放生研の全国 RBC 連絡会議の委員長も引き継がれ、その活躍ぶりは皆さんの知るところだと思います。

大西先生は、当初研究材料としてバクテリヤや粘菌を使っての紫外線の影響研究をされていました。私がアメリカ留学から帰国し、放生研のポストを得て「がん特別研究」の班長をしていた頃、大西先生は研究費を求めて班員となられ、培養細胞を使った「がん研究」を始められることになります。粘菌細胞が飢えると集まって動くように、研究費を求めて、研究テーマや研究材料を変えながら動き回り、最後には胞子嚢形成のごとく、素晴らしい成果を次々と上げられてきました。その柔軟な研究態度は、がん研究、温熱療法研究、重粒子線研究、宇宙生物学研究、低線量率放射線研究と研究分野を広げていかれました。それらの研究において、如何に研究分野を広げても常にTP53 遺伝子に注目してきたことが、大西先生を今日の大先生に成長させたことだと思われます。宇宙生物学研究にも乗りだされましたが、そのユニークな研究テーマを生み出したのは、奈良医大で生物学講座の教授として入試問題を一手に引き受け、学生の生物学実習を長年指導されて培われた深い生物学への造詣があつてのことだったと思っています。

また雑用を上手にこなす能力は抜群で、多くの学会の会長を、それも同時にこなすという離れ業もされていました。それらは自分から望んでやられているように思われるがちで、損をしている部分がありますが、その研究分野の発展を推進しようという気持ちが、見るに見かねてその雑用を受けた結果だと私は思っています。

関西には、京大医の菅原先生、阪大医の近藤先生という放射線生物学の両巨頭がおられ、お二人が先頭に立って多くの若手研究者を育てられました。医学の立場からのアプローチをされる菅原先生の未知の領域に果敢に挑戦するがためにユニークだが泥臭いと思われる研究手法と、物理学の立

場からアプローチされる近藤先生の論理的でスマートな研究手法という両極端の研究テーマの設定と研究手法は、放射線生物医学影響を学ぶ多くの研究者を刺激してきました。大西先生は結果として、菅原先生が作られた「太陽紫外線防御委員会」、「日本ハイパーサーミア学会」、「癌治療増感研究協会」、「放射線生物研究会」などを引き継ぎ、会長として研究を推進・発展させてこられました。また「日本放射線影響学会」の会長時代には、学会運営をお願いしていた学会事務センターが倒産して影響学会は危機的な財政難に直面しましたが、大西先生の隠された能力である集金力で、この危機を救われたことは余り知られていません。

先生の長年の夢であった ICRR (International Congress of Radiation Research) の開催を目指して、AARR (Asian Association for Radiation Research) を結成するという周到な準備を行い、2015 年には京都での ICRR2015 を誘致し見事に成功させました。その手腕には本当に敬服に値します。彼の実行力と先を見通す先見力無くして ICRR2015 開催は出来なかつたでしょう。

また、多くの弟子を教授にまで育てるという教育者としても、優れた素質を示されました。そのことが理学出身でありながら、奈良医大で学部長に推挙され、職を全うされた一因かと思われます。更に放射線生物医学教育にも力を入れられ、多くの著書の執筆、共同執筆の企画もされました。昨年の正月に、突然大西先生より電話があり、「放射線医科学の事典」の一項を書いて欲しいという電話が受けました。長く現役から離れているので、書けないと断っておいたのですが、結局書かされることになりました。しかし、その本の完成を待たずに旅立ってしまいました。

最後に非常に個人的なことですが今でも感謝を続けていることは、私の退官時に近畿 RBC を招集して退官記念講演会を開催して下さったことです。常に回りの人達を気遣う親分肌の大西先生でなくではできることでした。そのお返しをするチャンスを永遠に失ったことを非常に残念に思っています。合掌。

大西武雄先生を偲ぶ

奈良県立医科大学 未来基礎医学教室

森 英一朗

その知らせは、突然であった。奈良県立医科大学附属病院に、恩師・大西武雄先生が入院していることを高橋昭久先生（群馬大学）からのメールで知った（2017年5月下旬）。同年4月から、母校・奈良県立医科大学に教員として赴任していた私は、恩師の闘病をその時初めて知った。病室を訪れると、日本での教員の職を得たことを大変喜んで下さった。そして、これから日本で研究を進めていく上での心構えを教えて下さった。

大西武雄先生との出会いは、大学入学（2003年）して最初の生物学の授業であった。「バナナの悲劇」や「色素性乾皮症は大腸菌にもいる」などの衝撃的なフレーズと、その壮大なスケールの講義に、大学入学したばかりの私は、あつという間に大西先生の魅力に吸い込まれていった。授業の後、大西先生の部屋を訪れ、気付けばいつの間にか生物学教室に居付いてしまっていた。「お前は研究に興味があるのか？それなら、高橋君に教えて貰えば良い。」と言われてから、その言葉のまま、高橋先生の後姿を眺めながら、研究の姿勢を学んだ。こうして医学部の6年間は、あつという間に過ぎていった。

医学部1年生の時、まだ紫外線やDNA損傷が一体何なのかが良く分かっていなかった頃、いきなり「今度岡崎で、紫外線の照射実験があるから、高橋君に付いて行きなさい。」と言われ、「皮膚への紫外線影響」の研究に関わり始めた。この仕事で、学部卒業までに Journal of Radiation Research（2008年）に筆頭著者として論文をまとめることができた。また、その成果を、International Congress of Radiation Research（米国・サンフランシスコ、2007年）で発表することができた。そして、その学会で、将来の留学先の上司である David Chen（米国・テキサス大学Southwestern Medical Center）と出会った。

奈良医大の最寄の大和八木駅までの帰り道、繰返し仰られていたことを最近よく思い出す。「学会発表や論文発表のことは、同級生には話してはいけません。あなたの成功を心の底から喜んでくれるのは、あなたのご両親だけです。決して自分の業績を自慢してはいけません。妬みを買うだけで、何も生みません。良い仕事をしていれば、必ずいつか評価されます。だから、自分から言う必要は無いのです。」と、何かの折に触れて仰っていた。頑張って研究のまねごとをしていた私が、浮かれて自慢話をして、同級生等から要らぬ妬みを買わないように、いつも釘を刺して下さっていたのかなど、今となって思う。当時は、「何をここまで心配しているのかな。大袈裟だな。」と内心

思っていたが、最近少しづつ、当時仰っていた言葉の意味を理解できるようになってきたように思う。

初期臨床研修を終え、David Chen のラボに留学する頃（2011 年）になると、渡米の時期が近づくにつれ、「海外での研究生活は、思いもよらないことが起こる。奥さんが心を病んで、自殺したり、離婚したりした知り合いが何人もいる。森君の奥さんは、英語が得意か？ 外国の土地を楽しめるような明るい性格か？」と、事細かに心配して下さった。一時帰国した際に、挨拶に伺うと、「研究は進んでいるか？ 奥さんは馴染んでいるか？ 子どもに友達は出来たか？ 上司や同僚と喧嘩していないか？」と、心配事は尽きない様子であった。

病室を訪れて少し話をして、「時間がもったいない。早く仕事に戻って、論文を書きなさい。グラントを書きなさい。そして弟子を育てなさい。たくさん育てなさい。とにかく、良い仕事をしなさい。」と仰って、病室を早々と追い出された。そして、「Go ahead, go ahead! Don't look back!」と、いつも励まして下さった。病室にいながら、私がまだ仕上げていなかった論文の指導をして下さった。そして、無事その論文を投稿することが出来た。残念ながら、ご存命の間に論文受理の報告をすることは出来なかつたが、偲ぶ会で大西先生と御家族に論文受理（International Journal of Hyperthermia）を報告することが出来た。これが、私が日本に戻ってきて初めて出す論文となつた。

奈良医大生物学教室では、毎年忘年会を生物実習室で行っていた。名物は、焼きそば。学内の臨床の講座から、多くの共同研究者が訪れ、大西先生が作った焼きそばを食べた。学外に出ていた関係者の方も、一同に集っていた。私がこの忘年会に参加したのは、大西先生が教員をされていた時期の最後の 7~8 年間だったので、いつも私が最年少だった。忘年会に集まつくる大西先生の歴代の弟子の先生方を見て、本当に多様な分野の研究者を育ててきたのだなど、今認識を新たにする。もう、あの焼きそばを食べることはないのか。

仰げば尊し 我が師の恩

群馬大学重粒子線医学研究センター教授

高橋 昭久

遡ること平成元年。修士1年目の夏。初めて大西武雄先生の奈良県立医科大学生物学教室に足を踏み入れた。「どや。すっごいやろ。おっもろいやろ。ワクワクするやろ」とコテコテな関西弁のイントネーションで、門前の小僧に研究の醍醐味を熱く語って下さった。未知の生命現象を世界で誰よりも早く知りたいという気持ちが高まった。大西先生から「ちょいちょいちょい」と呼ばれ、大塚製薬大津研究所の所長を紹介され、すんなりと就職が決まった。就職してからも専修生として研究指導を続けて下さった。小生の結婚式でのスピーチのため東京の奥地までご足労下さった。「お前ならできる!」と大学教員への道を開いて下さった。スペースシャトル、ミール、国際宇宙ステーションでの宇宙実験など多くの貴重な機会を下さった。夫婦共々、ケネディ宇宙センター(フロリダ)とジョンソン宇宙センター(ヒューストン)に派遣して下さった。国内外の多くの素晴らしい方々をご紹介下さった。人生の道標を示して下さった。平成22年12月「さよならクリスマス会」と銘打って、妻と二人の子供もお招き下さり、年明けからの群馬大学への異動に向けて壮行会を開いて下さった。「周りの先生方に可愛がってもらひなさい。驕ることなく、臆することなく」と励まして下さった。平成27年、現職を拝命した時は、「万歳!」と大変喜んで下さった。

平成という時代を、昼となく、夜となく、誰よりも長い時間、ご一緒させていただき、その背中を追い続けてきた。大西先生の右手には到底およばないが、足手まといにならないようにだけ心がけてきた。弟子として、還暦のお祝い、各賞受賞のお祝い、退任記念パーティ、古希のお祝いなどできるだけのことは行ってきたつもりだが、これまで受けてきたご恩に比べて、感謝してもしきれない。

平成28年9月、奈良県立医科大学の長谷川正俊先生のところで、放射線治療を開始されることを打ち明けられた。「もう、だめかもしない」。初めて聞く弱音だった。当初、ご病状を秘密裡にされておられ、数年に及ぶご闘病中であったことを知った。平成29年5月末の朝4時に大西先生から電話がかかり、「人生の儂さを共有したい」と門下生だけに入院することの連絡を頼まれた。入院後まもなく、ご自身のパソコンからメールリストを託され、「入院していることを皆に伝えて」と頼まれた。その後、思いつくだけの国内外の関係者へも連絡を行った。予想以上の多くの方々からの電話やメールに励まされ、遠近を問わず病室を訪れる多くの方々とのご面会に目を潤ませておられた。この時、大西先生の後輩にあたる岡市協生先生が1月25日に急逝されていたことを知るも、岡市先生のご家族の意向もあり、大西先生へは伝えることができなかつた。また、病室から大

西先生の恩師にあたる野津敬一先生に電話した時、「ごめんなさい。先に逝くのを許して下さい」と大西先生が嗚咽される姿を、初めて目の当たりにした。終には、お見舞いノートを手渡された。「ここに連絡先があるから、偲ぶ会に呼んでくれ」「他に何かして欲しいことがありますか?」「もう十分や。これまで楽しかったな。ありがとな」、そんな会話を交わした。その後も週末毎のお見舞いを重ねた。容態が悪化している旨、長谷川先生から深夜連絡を受けた。新前橋から始発の電車に飛び乗り、奈良に向かった。胸騒ぎがしたのか、不思議なことに野津先生も箕面からタクシーでお見舞いに来られ、合流することができた。野津先生を車椅子に乗せて、病室に。「大西君、大西君。しっかりしろ。」と野津先生が大西先生の頭を驚撃みにして大きく揺するも回答は無かった。その3日後、7月8日の朝4時に再び長谷川先生からの電話。病室に駆けつけるも、時すでに遅し。

しかし、悲しんでいる暇は無かった。国内外の関係者各位への連絡、国際・国内雑誌への追悼文掲載依頼、叙位・叙勲申請の手続き、偲ぶ会の会場手配、挨拶のお願い、皆様からの弔意の取りまとめ、想い出のアルバム作成など、心を込めれば込めるほど、やることが増えていった。そんな中、野津先生が体調を崩されたことを知り、8月6日に箕面の病院にお見舞いに。その後、野津先生の身内から代筆で、偲ぶ会での追悼文が届くものの、8月27日に後を追うように讣報の知らせ。こちらも野津先生のご家族の意向で1カ月間は内密にということで、9月10日の偲ぶ会ではそのまま野津先生からの追悼文を代読させていただくことになった。当日は、大西先生が大会長を務めた想い出の国際学会の会場（奈良春日野国際フォーラム壇）で、長谷川先生から診療の経緯とご闘病の様子が紹介され、黙祷を捧げ、細井裕司先生（奈良県立医科大学学長）、車谷典男先生（奈良県立医科大学副学長）、神谷研二先生（日本放射線影響学会）、田中良明先生（日本ハイパーサーミア学会）、井尻憲一先生（日本宇宙生物科学会）、平岡真寛先生（国際放射線研究会議 ICRR2015）、米井脩治先生（ご友人）、内海博司先生（ご友人）から温かいお別れの言葉をいただいた。在りし日の大西先生を皆様から寄せられた想い出の写真で振り返り、和やかに大西先生との想い出を語り合うことができた。多くの皆様のご協力・ご支援により、総勢200名近くの方々にご参集いただき、100通以上の弔電も賜り、ご子息とご令室からのご挨拶に続き、松本英樹先生の閉会の言葉で、滞りなく「故大西武雄先生を偲ぶ会」をやり遂げることができた。

その後、9月22日には小生が大会長を務めた日本宇宙生物科学会第31回大会（群馬）において、「故大西武雄先生 追悼セッション」として高橋秀幸先生（理事長）の司会のもと、浅島誠先生（前会長）、谷田貝文夫先生（理研）、日出間純先生（東北大学）からお別れの言葉をいただいた。奈良から群馬に異動して7年経つが、初めて群馬に大西先生をお招きすることができ、新しく作り上げた研究室とスタッフを紹介できる良い機会になると、2年前から鋭意準備をすすめてただけに、遺影での参加となってしまったことが本当に残念だった。閉会の挨拶では、これまで抑えていた感情や思いがこみ上げてきて、悲しみを止めることができなかつた。

次世代を育てる立場になり、色々と要役を引き受ける機会も増え、まだまだご指導いただいたかったとつくづく思う。今となっては、恩返しは叶わぬが、恩送りで受け継いでいきたいものだ。

大西武雄先生、永年にわたるご指導、ご鞭撻に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。
野津敬一先生、岡市協生先生とともに、謹んでご冥福を心からお祈りいたします。



①大西武雄先生、②野津敬一先生、③岡市協生先生、④小生 1998.12.5 撮影